

現代のことは

やまだ
山田 奨治



子どものころに読んだ童話のなか
に、じぶんとつての名作といえる
ものが、誰にでもあるだろう。親や
祖父母に買ってもらって、何度も読
み返した本もあれば、図書館で借り
て数回しか読んでいないのに、強く
記憶に残っている話もある。

高い丘のうえに、「ちいさいおうち」
があった。季節が移ろいゆくなか
で、「ちいさいおうち」はときには咲
き乱れる花に囲まれ、またときには
しんと積もった雪に埋もれていた。
やがて「ちいさいおうち」の周り
には道路が造られ、家が建ち始め、
にぎやかになってゆく。路面電車や
高架鉄道、さらには地下鉄まで引か
れて、「ちいさいおうち」は空き家
になって、摩天楼の谷間に埋もれる。
やがて、かつての住人の子孫が「ち
いさいおうち」を静かな田舎へ移し、
ハッピーエンドとなる。

ちいさいおうち

都市化が自然環境の破壊をもたら
すこと、開発や発展が必ずしも幸せ
をもたらさないことが、少年だった
わたしにも直感的にわかった。大阪
の実家の前の土の道路が、アスファ
ルトで舗装されていく様子をみてい
てさみしさを感じたことや、舗装後
には照り返して夏がとて暑くなっ
たことへの不満も、「ちいさいお
うち」に共感した理由だったかもしれ
ない。

わたしがいまでもこの童話にひか
れるのは、香川にある母の実家が、
「ちいさいおうち」のイメージに重
なるからだ。わたしの「ちいさいお
うち」は讃岐の古い民家で、瀬戸内
海をみわたせる丘の中腹にある。子
どものころは夏休みを決まってこの
家で過ごした。水田や畑、竹藪に囲
まれ、池でメダカやオタマジャクシ
をつかまえ、祖父の畑でとれたスイ
カを井戸水で冷やして食べ、いとこ

たちと花火をして遊んだ。
青年になってからあとは、母の実
家は数年に一度遊びに行くだけにな
ってしまった。訪れるたびに、家
の周りが拓けていくのがわかった。
丘につながる広い舗装道路ができ、
池はコンクリートで護岸され、田畑
は住宅になり、竹藪が切り開かれた。
祖父母はやがて近くに居を移し、家
に住むとはいなくなった。九八年
には家のすぐ上を高松東道路が通
り、車がひっきりなしに行き来して
いる。童話ほど極端ではないが、わ
たしの「ちいさいおうち」も何だか
とても似たことになってきた。
たしかに交通は便利になった。か
つては大阪から船と車で八時間は
かかった道のりも、いまでは高速道
路を使えば京都からでも三時間ほど
で行ける。もはや気軽に行ける場所
なのだが、帰るのも楽なので、日帰
りが常になってしまった。今年九十
一歳になった祖母の顔をみる時間
は、けっきょく、不便だったころよ
りも減ってしまったように思う。こ
れも発展がもたらす弊害だろうか。
この夏、二年ぶりにわたしの「ち
いさいおうち」の様子をみてきた。
なかが改装されて、いまは貸家とし
て使われているようだった。童話の
「ちいさいおうち」のように、幸せ
な余生を送ってほしいねと、そっ
と祈った。

この部分は公開に適
さないため削除され
ています。

・情報学)
(国際日本文化研究センター准教授